

岐阜で「製本なら何でも任せられる」と全幅の信頼 勝田断裁機「SH380-HOW JMC-7s」導入、高品質断裁の“截ち”追求

株式会社フタバ製本

岐阜県岐阜市敷島町10丁目43番地
代表：久世裕之氏
TEL 058-251-5394



フタバ製本



久世裕之社長と勝田断裁機「SH380-HOW JMC-7s」

岐阜県で「製本なら何でも任せられる」と信頼される株式会社フタバ製本（岐阜県岐阜市敷島町、久世裕之社長）は創業から一貫して製本の高品質化を追求してきた。その同社が最も重視しているのが「毎日使う断裁機の截ち品質」だ。それを実現するために2025年2月に印刷機材商社の株式会社タイガを通じて勝田製作所の断裁機「SH380-HOW JMC-7s」（最大断裁幅1,160mm）を導入した。久世裕之社長は「製本のスタートである断裁は無線綴じ、中綴じなどの製本品質を決めます。紙の歪みや伸縮は断裁がカバーして製本作業をスムーズに運ぶことができるからです」と述べる。ゆるぎない製本品質を追及する背景には断裁機への信頼があった。久世裕之社長が製本を世の中にもっと知らせたいという経営理念は「ノート一冊から子ども達の未来を支える」とい



勝田断裁機をオペレーションする久世護会長

う「特定非営利活動法人ひまわりノート」の活動に発展している。

なぜ断裁品質を重視するのか

株式会社フタバ製本は昭和46年に現会長で今も断裁機をオペレーションする久世護会長（85歳）が「フタバ製本所」を創業したことから始まる。創業から数年後には5鞍無線綴じ機、中綴じ機を導入。平成2年に法人化して以降は15鞍無線綴



勝田断裁機「SH380-HOW JMC-7s」

じ機、新型中綴じライン、表面加工ラミネーターを導入し最終加工まで自社で完結する総合製本会社へと発展した。

岐阜県内を中心に東海各県から「製本ならフタバ製本」という信頼を集め、約120社の取引会社を持つ。高品質の製本を追求する同社の中心となっている2台の断裁機のうち、老朽化した1台を、かねてから「新台は勝田断裁機」と決め、今年2月に勝田製作所のベストセラー機「SH380-HOWシリーズ JMC-7s」（最大



公共図書館で一般市民向けの製本講座



商品パッケージの表紙でノートを制作

断裁幅1,160mm)を導入した。

久世裕之社長は「断裁機に求めたのは高品質な紙の截ちと安全性です。頻繁に使う断裁は截ちの品質が大事です。紙が歪まない截ち品質を追求する勝田断裁機は入射角が他とは違う独特な設定がされています。切る音が今までとは違い、切断面が綺麗で、ギロチンではなくて独特な入射角です。ダブルクランプですから力があります。1,160mm～1,550mmというワイドな断裁幅は、左右2本のロッドとクランクが刃物を駆動する両引き式断裁方式により、重断裁も一気に処理します。クランプは2段階で圧がかかります。以前の断裁機はクランプを1回踏むとそのまま降りましたが、勝田断裁機は安全のために2段階で圧がかかります。ソフトクランプから、次に高圧力がかかって截ちますから紙のブレがありません。機械の振動も緩やかで軽く踏んで切れている感覚があります」と断裁品質を説明する。

先進の安全装置はなぜ必要なのか

断裁品質とともに勝田断裁機を選んだポイントは「完璧な安全性」だった。久世裕之社長は「断裁機の障害物がないかをセンサーが感知してクランプがセンサーで読み取ってから截ちます。異物が挟まっているとクランプが止まります。オペレー



岐阜県 本巣市 大型ショッピングモールモレラ岐阜で親子お仕事体験イベント開催



岐阜駅構内にて秋のgiftクラフトフェアのイベント

ターは安全な断裁機を安心して使えます。勝田断裁機は早くから安全を追及しています。これからも様々な障壁から守ってまいります」と述べる。

新規導入の勝田断裁機「SH380HOW JMC-7s」は断裁のセット替え時間を短縮し生産性を高めている。久世裕之社長は「モニターの記憶容量は500コースあり、仕事は全て記憶されていきますので断裁作業のセット時間が大幅に短縮されます。断裁機を使わない日はありません。セット時間の短縮は生産性を高めています」と述べる。

製本ノートで社会奉仕活動

現在も断裁機をオペレーションする久世譲会長から継いだ久世裕之社長は早くから「岐阜県製本紙工工業組合若鮎会」で活動してきた。そうした経験から「特定非営利活動法人ひまわりノート」を結成し「ノート一冊からこども達の未来を支える」活動を岐阜市内の様々な会場で行い、ノートを製本して無償で配布してきた。会場は毎回定員を上回る参加者

で盛況だ。「一般市民の方に製本は、こうして作ることをアピールしながら体験をしてもらっています。ビール箱から、段ボールを切り抜いて表紙にしてゴムバンドを付けた本を作ります。パッケージの表紙は段ボールを持ち込んでいます。リングで製本してバンドの色を選んでもらい、オリジナルのノートを作って持って帰ってもらっています。神社では御朱印帳を作ります。参拝者に体験してもらい、お布地を持ってきてもらって自分で作り持って帰っていただいています」と製本をPRする活動が続けている。

久世裕之社長は製本のさらなる進化と付加価値を印刷会社とともに追求したいという。「無線綴じは背中が丸くなってはいけない、背中に角度を出すことが私たち製本の技術です。ひと手間かけて綺麗に上げています。最近多くなっているオンデマンドの印刷も製本で綺麗に仕上げてもらったら大変喜ばれます。手間がかかっても小ロットでも綺麗に製本で仕上げて欲しいというニーズが増えていくのではないのでしょうか」と今後の方向を述べている。